

「魔笛」から読む台本

《オペラ劇場あらかわバイロイト》オペラ監督 田辺とおる



第1幕6場・夜の女王登場
(1816年ベルリン国立歌劇場の舞台装置画・シンケル作)

「魔笛」を新演出で再演いたします。一昨年の上演時に書いた紹介文を少し抜粋させていただきます。

一口にドイツオペラといっても多様な世界ですが、誰にでもスツと楽しんでもらえるのはメルヘンでしょう。グリム童話や詩集「子供の不思議な角笛」等で知られる通り、ドイツはメルヘンの宝庫。それをオペラ化した第一世代の筆頭は「魔笛」を置いて他にありません。日本でも馴染深い作品です。そもそも王子タミーノが、どうやら日本人らしい。ト書きは「日本の狩衣をまとった王子」。伝統的演出では大和時代のような格好が多いようです。でも、輸入服？なんて言ったら台無しですから、ここは日本人とすることにしましょう。時代は架空、場所は多分エジプト。ザラストロは古代エジプトの神に仕える祭司です。モノスタトスらの部下は黒人。「神殿の後ろにピラミッド」という指定もあり、演出によってヴェルディの「アイダ」を思わせる舞台も見かけます。ただ、なぜ日本の王子がエジプトで蛇に襲われているのか、よく解りません。当時のヨーロッパ人が思い描いた異国情緒なのでしょう。

日本の公演記録も非常に多い作品です。日本初演も古く大正二（一九一三）年、帝国劇場の部分上演。全曲の演奏会形式公演が昭和十五年、舞台上演は二十八年だそう。もちろん日本語上演でした。

さて今回は、歌詞・セリフ台本から拾って作品を見つめてみたいと思います。

「私に去れ!!この若者を独り占めしようとの、Nein, nein! そうはいかないわつ」王子と姫の恋物語なのに、色気づいた年増よろしく女王の侍女三人が王子に御執心。会話していたのが突然三人とも同じセリフの独り言になる、実にオペラらしい箇所。会話劇の独り言は対話より大抵迫力が落ちるが、独白同士の間は音楽劇ならではの魅力だ。

「この神々しい肖像は我が心に新たな興奮をもたらす。名付け難きこの『何か』は何だろう。火の如く燃える心こそが愛なのか? そうだ、そうに違いない」イケメンテノールが歌う王子タミーノのアリア。いかにも、というコテコテの歌詞で、胸の鼓動を模した伴奏に乗って大甘の旋律を歌う。イタリアオペラも顔負けの二枚目アリア。大衆喜劇にこんな佳品をさらりと挿入してしまうところが、魔笛の名作たる由縁だろう。

「穢れなき我が子よ、悲しみの母の慰めよ。娘を救い出すのです。あの子は永遠に勝るお前のもの」と姫の救出を王子に託す夜の女王。既にタミーノは婿扱いだが、彼がザラストロの神殿で入信したことを知る第二幕では娘に対し「私の仇と結ぶような輩を愛しているとは!」と豹変。モーツアルトは自身の姑をモデルにしたが、このヒステリーは現代の姑も同じ事。第二幕に王子と女王の対決シーンが無いのは残念だ。

「それでは女がお前を騙したのだな? 女は行動もせずには喋ってばかりいる。舌の遊びを信じるつもりか?」僧侶が王子を説得する場面の一言だが、これは古典的な「男のグチ」。きつとモーツアルトの本音だろう（僕もここは「非常に納得して」歌っている）。僧侶は「友情がお前を聖地に導いて永遠の絆が結ばれるまで姫の安否は言えぬ」と続ける。魔笛でモーツアルトは、自らも入会していたフリーメーソンの秘密を暴いたと糾弾され、暗殺説の根拠の一つにもなっているが、実際それは全曲の随所で暗示されており、これもその一つ。

「神は貞節なパミーナの為に優しきタミーノを定めた。驕った母親から私が彼女を引き離した理由だ。あの女は妖術で我々の神殿を壊そうとしている。夕

ミーノは我々と結ばれ神に仕える者として徳に報い、悪徳為す者には罰を下す。くお、イシスとオジリスの神よ、新しい二人に英知の精神を与え賜え」神殿の主、高僧ザラストロが僧侶達に話す。異教である古代エジプトの神に移しながらもフリーメーソンを暗示する、モーツアルト自身の信仰告白だろう。現代の我々が読むと、魔笛は一体誰が良い者で誰が悪者なのか、いま一つわからない。自分達の神殿を壊す敵から娘を誘拐するのは善行なのか? 入信を促す宗教劇という側面が、ザラストロの言葉にはよく表れている。

「俺は黒いから恋しちゃいけないのか? でも白い女に惚れたんだ。俺を愛するか? さもなきや死んでしまえ!」ご主人様、私は無実です。それなら母親の方をあたるか?」モノスタトスという名は「孤立する者」の意。モーツアルトがこの役に込めた「人間の本音」は凄。差別主義・逆ギレ・上司への偽善・悪びれぬ転身...。現代劇さながら鋭い台詞の連続。「見てタミーノ、この涙は愛する貴方の為に流れるの。この愛の憧れを感じてくれないならば憩いは死ぬことだけ」パミーナ姫のアリアから。女性の未練を綴る愁嘆場は世界共通だ。近松の心中物も新派もハリウッド映画も連ドラも、こういう台詞は変わらない。でもモーツアルトがあてた音楽は素晴らしい。有名な交響曲四十番と同じ短調で切々と訴える名曲。音大試験から劇場オーディションまで、ドイツのソプラノが一生歌い続ける絶対の課題曲でもある。

「誰もいないよりは婆さんと一緒にいる方がまだまし、もつと美人に会うまでは」と、男の本心をあつさり吐いた自然児パペゲーノ。首尾よく美女には会えたが「パペゲーノ、いなくなっちゃった。俺は不幸な生れだ。お喋りしちゃったしなあ。ワイン飲んであの子に会ったら心が燃えちゃって死んでしまおう。美しい娘つたちよ、憐れんでおくれでも、ほんとに誰も止めてくれないのぉ!」と続く。手前味噌・見栄・酒・女。人間の持つ邪な本音の権化がモノスタトスならば、正直な欲求の権化がパペゲーノだ。日常生活ではこれほど率直に物を話すことはできないから、演じて気持ちいい事この上ない。

偉大なる人間劇、魔笛。御来場をお待ちしております。